

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月14日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520048

研究課題名（和文）：『大戴礼記』に残存する『孔子三朝記』についての基礎的研究

研究課題名（英文）：A Primary Investigation into *Kongzisanchaoji* of *Dadailiji*

研究代表者：末永 高康 (SUENAGA TAKAYASU)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：30305106

研究成果の概要（和文）：

『大戴礼記』中の千乗、四代、虞戴徳、誥志、小辨、用兵、少間の七篇について、詳細な訳注を作成した。また、その資料的性格の再検討を行い、これらがほぼ『漢書』芸文志所載の『孔子三朝（記）』に相当すること、今本が一度大きな攪乱を被って再編集されたものであること、その成立が『左伝』や荀子を溯るものであることを示すとともに、その思想的特質から、これらが兩戴記の中で比較的孤立した一群をなすものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

First, I rendered seven chapters of “Dadailiji”, namely “Qiansheng” “Sidai” “Yudaide” “Haozhi” “Xoobian” “Yongbing” “Shaoxian” into Japanese and annotated upon them minutely. And I proved that these seven chapters correspond to “Kongzisanchaoji” listed by “HanshuYuwenzhi”, but they had disturbed once and compiled again so lost original form of “Kongzisanchaoji” already, and the time of their formation were before “Zuozhuan” and “Xunzi”, and there is no chapter of “Liji” and “Dadailiji” that resembles these seven chapters in thought and style.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：儒家思想史・先秦思想史・大戴礼記・孔子三朝記

1. 研究開始当初の背景

郭店楚簡、上海博物館蔵戦国楚竹書等、戦国期の新出土資料の出現により、従来の研究において戦国思想史の資料として十分に活用されてこなかった資料群に新たな注目が集まりはじめている。その一つが『大戴礼記』である。漢代に成立した本資料には多数の戦

国期の資料が含まれている可能性があるにもかかわらず、各篇の成立年代が不明であることを理由に、戦国期の思想資料として積極的に活用されることはほとんどなかった。しかし、楚竹書の『内礼』『武王踐阼』等、『大戴礼記』と重複する内容を持つ新資料の出現は、この書の少なくとも一部分が確かに戦国

期に遡ることを証しており、その資料的性格の再検討がなされなければならない状況が生じてきている。

『大戴礼記』中の千乗、四代、虞戴徳、誥志、小辨、用兵、少問の七篇（以下「千乗等七篇」と省略）は『漢書』芸文志に記載される『孔子三朝（記）』の残存せるものと目されている。これらの篇についての研究もまた、武内義雄氏の先駆的な研究を除いてほとんどなされていない状態であった。かつ、近年の新出土資料の出現は、その武内氏の見解もまた再検討されなければならないことを示している。千乗等七篇は孔子と哀公との対話の形式を取るが、これと類似した形式を取るものに、『礼記』の孔子問居等の篇があり、武内氏はこれら諸篇を漢初のもものと推定されていた。ところが、この孔子問居の前半部とほぼ同文の戦国期の文献（楚竹書『民之父母』）が出現し、氏の見解を完全に覆してしまったのである。千乗等七篇と同文の新出土資料はまだ現れてないが、楚竹書『季康子問於孔子』、『孔子見季恒子』のように孔子と魯の大夫との対話の形式を取った篇が出現しており、このような形式の由来が古いことを証している。千乗等七篇についてもまた、これらの新出土資料の知見に基づいて、その資料的検討を改めて行う必要が生じてきたのである。

2. 研究の目的

上述の状況を受けて、新出土資料の出現による新たな知見に基づいて千乗等七篇の資料的性格の再検討を行い、この資料を戦国・秦・漢期の思想史資料として再活用していく道筋を付けることが本研究の主たる目的である。

本研究の遂行においては、現在の知見に基づいて新たに千乗等七篇の訳注作業を行っていかなければならない。千乗等七篇を含む『大戴礼記』の訳注は二三存在しているが、いずれも十分なものであるとは言い難い。そこで、上記の目的よりすれば付随的なものに過ぎないが、千乗等七篇について、より完備した訳注を提供することもまた、本研究の目的の一つとなる。

3. 研究の方法

本研究の基礎的作業は、千乗等七篇に対する訳注作業である。この作業にあたっては、清朝以来の考証学が達成した成果と近年の新出土資料の出現がもたらした知見をともに利用することになる。この基礎作業をもとに、千乗等七篇の資料的性格の再検討を進めていく。その際には、まず千乗等七篇と重複または類似する語彙、表現を他の先秦・秦・漢文献に求め、それら相互の関係を明かにしていく。また、千乗等七篇と同じく孔子と哀

公との対話の形を取る諸篇に分析を加え、それら諸篇と千乗等七篇との関係を考察していく。ここでは特に、『大戴礼記』哀公問五義、哀公問於孔子、『礼記』儒行三篇を『漢書』芸文志所載の『孔子三朝（記）』の全体または一部とする武内氏の見解が再検討されることになる。さらに千乗等七篇の各篇の構成や、各篇間の関係から、この資料全体の資料的性格を明らかにするとともに、各篇に記された思想の分析を通じて、この資料の思想史的な位置づけを行っていく。

4. 研究成果

本研究によって得られた主たる結果を以下の六点に分けて示す。

（1）千乗等七篇と『孔子三朝記』との関係について：

①諸書に引かれる『孔子三朝記』の引用が千乗等七篇と基本的に一致することから、顔師古の証言等、両者の関係を疑わせる資料はあるにせよ、千乗等七篇を『孔子三朝記』と見なす王忠麟説はおおむね妥当である。

②千乗等七篇は哀公と孔子の対話を一貫して「公曰」「子曰」で導いており、また各篇間で共通の言い回しが多いなど、強い一体性を示しているのに対し、『大戴礼記』哀公問五義、哀公問於孔子、『礼記』儒行等、哀公孔子問答の形式を取る他の諸篇は、基本的に「哀公曰」「孔子（対）曰」で両者の対話を導いており、用語的にも千乗等七篇と強い一致を示すものがないことから、哀公問五義等を『孔子三朝記』に含める武内説は成立し難い。したがって、今本の千乗等七篇はほぼ『漢書』芸文志所載の『孔子三朝（記）』に相当すると考えるべきである。

③なお、今本には従来指摘されてきたもの以上に錯簡が存在しており、各篇内における対話内容の不連続や、指示語の指し示すものが篇中に見られないこと等よりすれば、今本は一度大きく攪乱を受けた後に再編集されたものと考えられる。

以上の内、①、②は武内説を斥け、王忠麟説に帰るものであるが、他文献に見える哀公孔子問答に対する千乗等七篇の特異性を明らかにしており、他の哀公孔子問答と切り離して千乗等七篇を一群の資料として用い得ることを示している点で、従来の研究を一步進めたものと言えるであろう。③については、これまでの研究が全く指摘してこなかったものである。なお、本研究が新たに指摘した錯簡としては、少問篇「天政曰正、地政曰生、人政曰辨」「苟本正、則華英必得其節、以秀孚矣」の后者が同篇下文の「凡草木根斲傷、則枝葉必偏枯。偏枯是爲不實」の下に有るべきものであること、前者が小辨篇の「是故昔者先王學齊大道、以觀於政」の下に有るべきものであることなどが挙げられる。

(2) 千乗等七篇の編纂時期と編者について：

①千乗等七篇と『左伝』が重複する例は十以上指摘できるが、『左伝』の編者が千乗等七篇を利用していると思ふべきであり、また『荀子』大略篇との重複も千乗等七篇の先行を示していることから、この篇の編纂時期は戦国末期以前に溯ると考えられる。よって千乗等七篇は基本的に戦国思想史を構成する資料として用い得ることになる。

②千乗等七篇の編者については不明であるが、「公曰」「子曰」で哀公と孔子の対話を導く形式が『論語』と一致しないことから、『論語』の編者と同一であるとは考え難く、また思想的に、曾子学派、思孟学派や『大学』の編者とも異なると言える。『左伝』で千乗等七篇の語が子貢によって語られていることよりすれば、編者はあるいは子貢の学統を受け継ぐものであるのかも知れない。

③千乗等七篇はすべてがその編者のオリジナルのものではなく、先行する何らかの資料を再編纂している部分があると考えられる。たとえば、千乗篇で「四佐」について述べる部分は『礼記』王制との重複が目立つが、この部分は「司徒」「司馬」「司寇」「司空」の職掌について、それぞれ100から130字程度で記された資料をもととして、そこに文章を加えて構成されたものと考えられる。また、この「四佐」が、千乗篇の前半部では「四輔」と呼ばれていることから、この前半部は後半部とは別系統の資料に依っていることが推測される。さらに、少間篇で四代の変遷の歴史を物語る部分なども、楚竹書『容成氏』のような資料から引き抜いてきたものと考えられよう。なお、『礼記』王制との重複は、両者に共通の資料の存在を示唆するに止まり、両者の先後を定めるものではない。

以上の内、①については、阮廷卓『孔子三朝記解詁纂疏』(1964)が下しているのと同じ結論であるが、新出土資料の知見や、阮氏の指摘していない事項を交えたものであり、阮氏の結論を補強するものであると言える。②については、その編者を特定するに至らなかったが、先秦資料における千乗等七篇の孤立性(下述)を考えるならば、これはやむを得ないことと考える。今後の新資料の出現を期待したい。なお、千乗等七篇に見える「子曰」の内容が『論語』の孔子言と大きく隔たることは、四代篇冒頭で「四代の刑政」が肯定的に語られているのと『論語』為政篇の「子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥」を比較するだけでも明らかであり、これらの篇に見える「子曰」が孔子言をそのままに伝えるものでないことは言うまでもない。③については、従来の研究が全く指摘しなかったものである。資料的な制限から、千乗等七篇の編

者が利用した資料を特定することはできないが、これらの篇が原資料に対して二次的な加工を経て作られたものであることは、これを戦国思想史を構成する資料とする上で留意しなければならない点である。なお、本研究においては、他書に見える哀公孔子問答についても、同様に二次的な加工が加えられているものが多いことを論証した。

(3) 千乗等七篇の思想的特徴について：

①千乗等七篇において有韻の部分は天地人の三才を並列する部分に集中し、これらは何らかの黄老文献より引用されたものと考えられる。天地人の恒常に従うべきとする点においては、黄老思想からの影響が窺われるが、その他の道家的な要素は完全に排除されている。

②天地人の恒常に関連して、曆について強い関心を示しており、時令説の影響も読み取れるが、時令の遵守よりは為政者の「仁」が強調される。また、休祥災異も説かれるが、災異説とは一定の距離を持つ。

③礼の制定者として周公ではなく、唐虞の時の伯夷が重視され、全体として周より以前の古史への関心が強い。また、国制を含む礼制や、取人の法に対しても高い関心を示している。

以上の点は、従来千乗等七篇がほとんど研究されてこなかったことから、本研究においてはじめて指摘されたものとなる。①については、一部の先秦文献については、脚韻の有無からその成立過程の推定することの有用性は従来から知られていたが、この手法が千乗等七篇の分析においても有用であることを示した点に意義が認められよう。また、本研究においては、他の先秦文献において三才を並列する部分で脚韻を踏んでいるものをリストアップしている。これも資料的価値を有しよう。また、本研究において千乗等七篇の成立が荀子以前とされ、また、これが黄老文献を引くものであることが明らかにされたことは、いわゆる『黄帝四経』等の黄老文献の成立を戦国最末期以後に引き下げる定説に対して見直しを迫るものである。これもまた、本研究の先秦思想史に対する寄与の一つであろう。②、③については、いまだ表面的な分析のレベルにとどまっているが、千乗等七篇の思想的研究としては最初のステップを踏み出したものと言えるであろう。さらなる分析は今後の課題である。なお、用兵篇で蚩尤作兵伝説を否定する部分や、小辨篇で「忠」を分析した部分の持つ思想的意義については、先行研究においてすでに論じられているので、本研究においては割愛して論じなかった。

(4) 他文献との思想的関係について：

古史に対する関心は『大戴礼記』五帝徳、帝繫に顕著であるが、この二篇が五帝の系統を明確に示すのに対し、千乗等七篇は四代のレベルにとどまり、前二篇と密接なつながりを持つとは言えない。また、取人の法に対する関心は『大戴礼記』文王官人に顕著であるが、これが文王に結び付けられているのに対し、千乗等七篇は堯舜あるいは伯夷のそれに関心を示しており、かつ、思想的にもそれほど近縁のものとはいえず、千乗等七篇は兩戴記の中では比較的孤立した一群をなす。ただし、その思想的特徴は『尚書』堯典（今文）と大きく重なっており、千乗等七篇の編者が堯典の整理に関係していた可能性を示している。

以上もまた本研究がはじめて指摘するものであるが、ここで言う孤立性とは、同一の編者のものと考えられる篇が兩戴記に見えないという意味であり、用兵篇の一部を『大戴礼記』盛徳が利用しているなど、文献相互の間に関係がないわけではなく、他文献との関連については更なる研究が求められよう。堯典との関連も単なる見通しを示したに過ぎないが、千乗等七篇が孟子学派のものとは考えられないことから、堯典の整理と孟子学派を結び付ける旧説の再検討をうながすものとなる。

(5) 訳注作業について：

千乗等七篇の全体に対して詳細な訳注作業を行った。訳注に際しては、盧辯、汪中、孔広森、汪照、王聘珍、洪頤煊、王樹楠、孫詒讓、戴礼、阮廷卓等の『大戴礼記』『孔子三朝記』に対する諸注釈はもとより、『経義述聞』、『香草校書』等の札記類も幅広く参照して、その善に従い、時に出土資料の知見等を踏まえて私見を示した。なお、訳注作業の過程で行った各種注釈の彙集作業は、黄懐信『大戴礼記彙校集注』、方向東『大戴礼記匯校集解』の不備を補うものであり、これまでなされたものの中で最も完備したものである。

(6) その他：

他に特筆すべき成果として、四代篇に見える「名」に関して、新出土資料の『恒先』等を利用しつつ、その背後にある言語観の特質を明らかにしたことが挙げられる。四代篇の「発志為言、發言定名」の解釈上の困難はここに見える「志」→「言」→「名」の順序にあった。これが名辞を言語の構成要素とする言語観と鋭く対立するからである。他方、新出土資料の『恒先』では「志」→「言」→「名」の生成が明確に語られており、「言」を「名」に先行させる言語観が戦国時代に確かに存在したことを示している。そこで、同じく「言」を「名」に先行させる『韓非子』主道

篇の「刑名参同」に関する部分を再検討しながら、「刑名参同」においては、ある行いを動作または行動として記述するのが「言」であるのに対し、その「言」の内に含まれる目的等を見抜いてその行いを行為として記述するのが「名」とされていることを明らかにして、これらの「言」→「名」の順序を示す文献においては、「名」は「言」の構成要素としてではなく、ある「言」の全体を統合するものとしてとらえられていることを示した。また、この言語観によれば、ある「物」のあらわれを記述するのが「言」となり、その「言」を統合して、その「物」が何ものであるのかを記述するのが「名」となることから、この言語観が「物」の生成と同時に「形」と「名」が生成されるとする道家の生成論的思考と密接に結びつくことを明らかにした

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 末永高康、『孔子三朝記』の構成とその思想、鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編)、査読無、第63巻、2012、1-22
- ② 末永高康、『孔子三朝記』初探、鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編)、査読無、第62巻、2011、1-23
- ③ 末永高康、『孔子三朝記』初探(中文)、南京師範大学文学院学報、査読無、総第61期、2011、20-32
- ④ 末永高康、「名出於言」考、中国研究集刊、査読有、総50号、2010、84-102

[学会発表] (計2件)

- ① 末永高康、『孔子三朝記』初探、2010年中国经学国際学術研討会、2010.11.15、南京師範大学
- ② 末永高康、『孔子三朝記』中之名、中日韓経学国際学術研討会、2010.05.27、香港浸会大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

末永 高康 (SUENAGA TAKAYASU)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：30305106